



1979 年生れの小口は茨城大学大学院を修了後、主に水戸と東京において、焦らず、確実な展覧会を行っている様子だ。教育学部を修了したとしても、作品を作成することに代わりがないという美術家の本質を静かに表明しているように感じる。大作には、決意が込められているように思えてならない。今回は大小の油彩を 10 点、展示した。



小口の作品の特徴は、確実な写実とそれに伴うイメージと色彩の拡張にある。作品の詳細を追うと、細部まで丁寧に描かれているというよりも、細部が全体に及び全体を形成しているため、総てに必然性が生まれ、尚且つ、構図や構成を破壊することが決して無い。遠近感が自然に生れる。



絵画が絵画として存在するためには、イリュージョンを用いて現実に到達しなければならない。そのために生み出されたのが東洋三遠であり、西洋遠近でもある。しかし実はこれ以外のイリュージョンも、大量に存在する。ギリシャ、ローマ、ヘレニズム、インド、アフガニスタン、中国、アイヌ、インディアン、アボリジニ、枚挙に遑が無い。J・ポロックの絵画で最も重要なのはオールオーバーな画面ではなく、画面内の遠近、奥底と手前の関係性にある。小口はこの問題を、無意識的であってもクリアしている。



小口の植物を見ると、アンリ・ルソーとサンドロ・ボッティチェッリの作品に表れる植物の類似を思い出す。時代も立場も異なる二者に共通する事項とは、植物が持つ躍動感を逃さず、尚且つ背景とせずに人間が対峙すべき恐るべき自然を象徴させる点にある。小口にはこの系譜を引き継ぐだけの実力と資格が備わっている。



小口はそれに伴い、色彩をも自由に変化させている。全体のことを考えずとも、個々が全体のトーンを汚していないのだ。しかし汚さない意義が未だ生れていない。ブリューゲル兄弟は何故汚したのか。東洋画の場合はどうだろう。小口には果てない探求が待っている。その深淵が作品の中にぱっくりと口を開けている。そこに飛び込むべきだ。